

一湯漬は慈昭院殿御時、御一獻ニテ御食参り候、然ば聞召醉候て、御食ニ御手のつかず、湯ニつけられてあがり候はんずる由被仰候つる、御相伴衆まで湯ニ漬られ参、是より湯漬世上ニ一段はやり候由一説也故ニ湯漬の御汁并御まはりまでこしらへ様、供御ニ無相違由也、  
一湯漬は引物なくて、膳數五ツ迄参候事本式也、本膳ニ御數七二ニ五三ニ三四ニ三五ニ三、以上廿一が本也、

一湯漬の時は、必さきへ盃出る、食ノ時は食過て盃出る、扱酒過て銚子取湯出る也、

一湯漬ノ時も必後ニ湯出べし、當世出ぬといふ沙汰有共、必出し候はで叶はぬ儀式也、

〔貞丈雜記<sup>六</sup>飲食〕一湯漬は、東山殿<sup>義慈昭院</sup>御酒に酔せられしにより、供御に湯をかけて参りしよ

り始りし也、依之湯漬の時は、先盃を出して、扱湯漬を出すなり、<sup>略</sup>中又湯づけ食ふには、先めし

に湯をかけて食て、さいは一番に香の物よりくひ初る事同記<sup>并記</sup>に見えたり、ゆづけは右に

ある如く飯に替る事なし、膳を出して直に湯桶<sup>ユカ</sup>を出すこと、常の飯には替りたり、今世上に湯

漬と云は、さい數を少くするなり、本膳には汁を置かず、二の膳に汁をおいて出す、本膳、二の膳

共にさい數は不定事也、

〔大草殿より相傳之聞書〕一しきの湯づけと申は、七五三也、同集養の事、御ゆづけと一二三四五六七まで御膳参り候て、御湯あがり候御座にをくなべて七ツめ迄参り候へば、恐惶の人には、八目まで参り候、平人は五ツ目まで参り候へば、恐惶の人には、六ツ目までまいり候、平人に三ツめまで参り候へば、恐惶の人には四ツ目までまいり候、とかく一膳多まいり候時は、御湯あがり候て、一と二ともめしをきこしめしたる時、一膳は後あがり候、

一湯漬の膳にむかい集養ある時は、上座のかたへ、我足の裏のかたをむけぬやうに、ひぎをくむべし、さて座中を見合て、わんを取上げ、湯をば右の手にて、左の手をそへたるが能候、扱はしをば